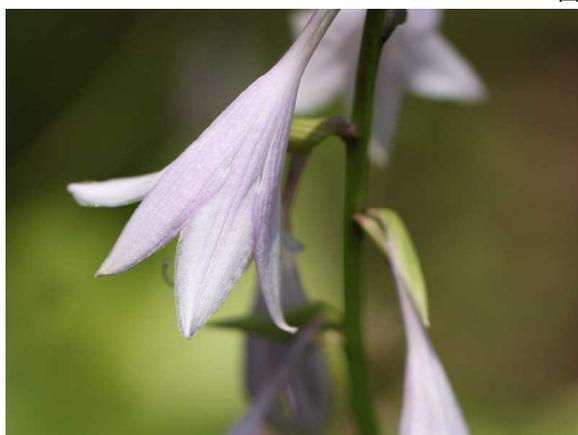


『今月の天候と農作業』

通巻第5592号
6月号
平成28年6月3日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 6月4日(土)～ 6月10日(金)

前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめに雨の降る日があるでしょう。※明日から1週間の、費別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 6月11日(土)～ 6月17日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 6月18日(土)～ 7月1日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稻

1 追肥と水管理

コシヒカリの穂肥は、幼穂長が1 c mの頃に行い、葉色により量を加減します。田植時に一発肥料を施用した場合は穂肥の必要はありません。水管理は根の活力を維持するため間断かん水を行いますが、幼穂伸長期や出穂期になるため落水は過度に行わないよう注意しましょう。また17℃以下の低温で幼穂が障害を受けるので、気象情報に注意し、低温となる場合は深水にして保温に努めましょう。

2 病虫害対策

いもち病は、収量・品質を低下させる重要病害です。去年は注意報が出され、穂いもちも多く見られました。気温が上がり曇雨天が続くと発生しやすい条件となります。穂ばらみ期と穂ぞろい期の防除を基本に、発生を確認したら臨機防除を行きましょう。また、カメムシによる玄米検査等級の格落ちが毎年多く発生しています。カメムシの防除は、穂揃期とその7～10日後の2回行います。カメムシの繁殖場所である畦畔や周辺草地を出穂の2～3週間前迄に一齐に除草することも有効な対策です。水田内のヒエやホタルイもカメムシを誘引するので早めに抜きましょう。

◆ 普通期水稻

1 代掻きと田植え

代掻き時の浮遊ゴミには紋枯病等の菌核があるので処分しましょう。ヒノヒカリは登熟期の高温で白未熟粒が発生しやすいので、早植えは避けましょう。まいひかりなどの晩生種の遅植えは出穂が遅れ低温障害を受けやすくなるので注意しましょう。田植時はいもち病やウンカ類の予防のために箱施肥を行います。田植え後の余り苗は直ちに処分しましょう。

2 除草

除草剤はラベルの記載内容をよく確認して正しく使用しましょう。ジャンボ剤やフロアブル剤は、水深が浅いと拡散不十分で薬害の恐れがあります。散布後7日間は掛け流しせず止水しましょう。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆ 収穫終了後の管理

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱消毒を行いましょう。

特に、きゅうりではアザミウマ類、トマトではコナジラミ類が媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

作物がウイルス病に感染すると回復は難しく、草勢の低下等により収量は大幅に減少します。これらのウイルスを媒介するのは、ハウス内に生息するウイルスを保毒した昆虫で、これをハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ち出す前に、ハウスを閉めきり蒸し込みを10日間程度行うなど、害虫を駆除した上で残渣を持ち出すようにしましょう。特に、ウイルス病が発生したハウスでは、蒸し込みと合わせて周辺雑草の除草を実施しましょう。

◆ 夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されますので、次の点に留意した栽培管理を行いましょう。

- ① 通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに排水する。
- ② 着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果を行う。
- ③ 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。
- ④ 摘葉や整枝・誘引を適切に行い過繁茂を防ぎ、通風と採光を良くする。
- ⑤ 換気を良好にし、葉の濡れ時間を短くする。
- ⑥ 集中豪雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を十分に行う。

一方で、曇雨天が続いた後、急に晴れ間が出た場合など、葉やけやしおれが発生しやすくなりますので、日射が強い時に備えて、寒冷紗などで遮光できるように準備しておきましょう。

(黒木正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 共通（排水対策）

梅雨期を迎えます。

畦や作物が冠水すると、根傷みによる生育不良や病気発生の原因となります。排水を促すため、ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路を整備・点検し、確実に排水口につなげます。ほ場外の排水路の整備・点検も併せて行いましょう。

◆ さといも

トンネル栽培は収穫期となります。数株試し掘りを行って重量を計り、10aの換算収量が1トンに達したら収穫を始めましょう。また、疫病が発生しやすい時期になりました。雨の合間をみながら定期的な予防を続けましょう。

◆ かんしょ

トンネル栽培は収穫時期となります。収穫は、植え付け後100日目から可能となりますが、試し掘りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると、皮色や形状が悪化しやすくなるので適期収穫に心掛けましょう。

◆ おくら

収穫期です。草勢が低下すると葉の切れ込みが深くなりますので、追肥や摘葉については草勢を見ながら行いましょう。

◆ ほうれんそう

高冷地栽培では、4月に播種したものが上旬より収穫期を迎えます。収穫時に緑が濃く、葉肉の厚い状態にするため、収穫予定の7～10日前から灌水を控えます。また、収穫後は直ちに次作の準備に取りかかりましょう。降雨も多くなり、べと病が発生しやすい環境となりますので、抵抗性品種を利用し、ハウス内の通風を良くしましょう。

◆ らっきょう

中旬までには収穫を終えましょう。土壌水分の多い時に収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因になりますので、晴天の続くときに収穫しましょう。自家採種をする場合は、球が完全に肥大充実してから掘り上げますが、萎縮、黄化症等の生育不良株は注意して除きます。掘り上げた球は陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管しましょう。

(杉村幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の着花量は、やや多い傾向が見られます。結果数の多い樹では、6月中旬から、小玉果や内成り果を中心に荒摘果を始め、中玉以上の果実生産を目指しましょう。

◆ かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300ミリの降雨があると薬剤の効果がなくなります。250ミリ程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らすようにしましょう。

◆ 完熟きんかん

一番花の安定した結果は大玉生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温や満開期のビニール被覆を実施し、十分な温度を確保しましょう。雨天が続く時は、昼間も加温して30℃程度を維持しましょう。

◆ マンゴー

日焼けや高温防止のための過度な遮光は、着色不良や糖度の低下を招きます。遮光ネット等のこまめな開閉により、十分な日照を確保しましょう。

栽培期間中の過度な節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定等の作業に入りましょう。樹齢の進行と共に、着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では、改植を行いましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

収量確保には施肥が非常に重要です。夏肥の施用を必ず行いましょう。特に、樹勢が落ちたり果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。1年に1回の施肥ですむ肥料も開発されています。農業改良普及センターやJAに相談してください。

(山口 和典)

花 き

◆ 夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなりますので、気温の低下を図るとともに、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布、葉水をうつ等の対策を実施して下さい。「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施して下さい。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を確保しましょう。「精の一世」は6月10日前後が8月盆出荷の消灯日になります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れますので、夜間はシェードを開放し、昼温も換気を十分に行いましょう。

◆ 秋ギク

白さび病等の病害は健全な穂での親株育成、親株ほ場での予防の徹底、適切な農薬の選択等の対策をとり、本ばへ持ち込まないようにしましょう。農薬の選択については地域の農業改良普及センターやJAに必ず相談してくだ

さい。

◆ デルフィニウム

夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、本葉2枚展開時から16時間、10℃の条件で行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になりますので、生育に合わせた細やかなかん水、施肥管理を実施して下さい。

◆ ホオズキ

7月盆出荷作型での着色のためのホルモン処理の時期です。ホルモン剤散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布前後数日は寒冷紗により遮光して下さい。

ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや薬害が発生しやすくなりますので、高温時には換気を徹底して、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

◆ シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染の恐れが最も多い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させますので、適期防除に努めましょう。

また、シキミは特に湿害を受けやすい作物ですので、梅雨時期の排水対策を徹底して下さい。

(中村 広)

畜 産

梅雨に入り、気温・湿度とも上がり、家畜が暑熱ストレスを大きく受ける時期になります。雨水が畜舎内へ降り込まないようにするとともに、風通しをよくするためカーテンの上げ下げをこまめに行いましょう。畜舎周囲の水たまりは降雨後の蒸散時に畜舎内の湿度を急激に引き上げます。雨トイの設置は水たまりの解消につながりますので有効です。

子牛の下痢対策では、敷料のこまめな交換が効果的です。下痢が発生している子牛に接触した場合は、他の子牛へ下痢が蔓延しないよう隔離するとともに、長靴を交換し手指の消毒するなど人を介して移らないよう気をつけま

しょう。

乳牛は暑熱ストレスを強く受ける家畜です。飼料摂取量の減少と乳量の減少が起きます。牛舎ファンを常に回し、牛体、1頭1頭に直接風が当たるようにしましょう。また、乳牛の場合、乳量にもよりますが1日に60～90リットルの水を飲むとされています。新鮮な水がいつでも飲めるようして下さい。また子牛にとっても水は大事です。子牛用のバケツなどで飲水させる場合は水の交換を頻繁に行い新鮮な水が飲める環境を作りましょう。

サイレージも腐敗しやすくなります。サイレージの色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は要注意ですので給与しないで下さい。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないよう、こまめにチェックが必要です。

長雨による排水不良は、湿害などにより飼料トウモロコシなど作物の生育を阻害します。圃場周辺に排水溝を設置し、圃場内に水が貯まりにくいようにしましょう。

(須崎 哲也)

工芸作物

◆ 茶

1 二番茶の摘採

二番茶の摘採期は降雨が多いため、雨の影響を考慮しつつ摘み遅れのないよう適期摘採に努めましょう。

樹勢の強い茶園は、摘採前7日間ほど黒寒冷紗等で被覆し、積極的に品質向上を図りましょう。被覆により、黒葉腐病・葉擦れ・葉焼け等が発生し易くなるので、生葉品質の低下に注意しましょう。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の7日後頃に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。本年も炭疽病多発傾向のため、地区防除基準に準じ、速やかに防除を行いましょう。

深刈り更新は、二番茶後にできるだけ早く、古葉が残らない高さで実施しましょう。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切り55～60日後に中切り面より3センチ程高い位置で一回目の整枝をしましょう。

施肥は、二番茶摘採前後に地区施肥基準に準じ、速効性肥料を施用しましょう。

3 チャトゲコナジラミの対策

平成26年に県内茶園で発生が確認されて以降、チャトゲコナジラミ発生園は県北を中心に拡大しています。本害虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した際は、地域の農業改良普及センター等関係機関に相談してください。

①虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察しましょう。

②園の畝間にあるクモの巣などを観察しましょう。

③採袋や製茶工場の生葉コンテナ周囲を観察しましょう。

(黒木清人)

◆ しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払い、除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後、均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(永野 学)

◆ たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。

1 収穫は、適熟葉収穫に努め、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保を図りましょう。また、立枯病などの病害葉はクジリ取りを行い区分収穫に努めましょう。

2 収穫葉にマルチ片や土砂が付着している場合には除去しましょう。また、取ろし時にも異物が混入しないように心掛けて作業しましょう。

3 梅雨入り前には、ほ地の排水対策や環境整備に心掛け、耕種的病害防除を徹底しましょう。また、農薬を使用する際には、使用基準を守り、野帳・使用実績票へ記帳しましょう。

4 乾葉の取ろし時には、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょう。包を貯蔵する際には、たばこ以外の臭いを有する物を避けて貯蔵しましょう。また、虫害の被害を受けないよう、全包ビニール梱包を行いましょう。梱包の際は水分に気をつけて、口を養生テープ等で閉じて貯蔵しましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	葉いもち 穂いもち	並 —	5月中旬に、県内で葉いもちの発生が確認されました。常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、特に注意が必要です。 今後梅雨入りとともにいもち病がさらに発生しやすくなるので、早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稻	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜 ※	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 媒介虫は次期作のウイルス病の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。 防除情報を発表していますので防除の参考にして下さい。
いちご (親株)	ハダニ類	—	発生面積率、寄生株率ともに平年並の発生となっています。親株から苗に移行・増殖するので防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	やや少	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年よりやや少ない誘殺となっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメやナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培) ※	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 やや多	枯れ枝は黒点病の感染源となるので除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	やや少 並 やや多	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザリハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカバラムシ	並 やや少 並 並 並 並 並 並	新芽生育期にチャノミドリヒメヨコバイに被害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 チャノコカクモンハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。
<p>1) ※は防除情報を発表しています。</p> <p>2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki です。</p>			